「大坂の史跡を訪ねて」 連載９回目

～大阪城周辺～その４

長谷吉治（おさたによしはる）

①京橋川魚市場跡　都島区片町1丁目

大阪城京橋口から出て、京橋という橋を渡ります。右手に近代的なＯＢＰ（大阪ビジネスパーク）の高層ビルが美しく見えます。橋を渡り終えると左手に「京橋川魚市場跡」という石碑が見えてきます。

説明板に以下のことが書かれてあります。

『大阪の魚市場といえば雑魚場市場が有名である。しかし近世の魚市場はひとつではなく、木津や天満にも海魚を扱う市場が営まれていた。また海魚とは別に川魚を扱う市場が京橋にあった。京橋川魚市場の起源は、石山本願寺の時期に設けられた雑魚場とされる。もともとは漁民が、京橋の北詰に川魚を持ち寄って販売する市のようなものだったと考えられる。寛保元年（1741）の「京橋川魚独占販売由来記」によれば慶長年間（1596~1615）のはじめころに、小出播磨守秀政の指示を受けて構成員55人、うち5人を幹事である年寄とする市場機構のシステムが教えられた。以降近世を通して、幕府に大坂で川魚を独占的に扱うことを公認された市場となった。近代に入り、市場機構の変革がすすむ中、京橋川魚市場は明治末期には中之島6丁目付近に移転し、大正4年（1915）に大阪川魚株式会社が設立された。』

京橋から見たＯＢＰ

②川崎東照宮（建国寺）跡

～長州藩屯所跡～　北区天満１丁目

「京橋川魚市場跡」を後にし、大きな道路を横断、旧淀川（大川）に架かっている川崎橋を渡ります。ここは夏、日本三大祭りのうちのひとつ、天神祭で賑うところです。橋を渡り北へやや行きますと滝川小学校がありますが、校門の前に「川崎東照宮跡」という石碑があります。

このあたりは、豊臣政権の頃、織田有楽斎の邸がありました。

徳川家康はこの地によく赴き、有楽斎と共に茶を楽しんだようです。その後、大坂の庶民から豊臣家を忘れさせるため、前号で紹介した５代目大坂城主松平忠明がこの地に東照宮を建てました。

毎年、家康の命日である４月１７日に「権現まつり」を盛大に行っていたようです。川崎東照宮は建国寺ともいわれていました。

幕末期、鳥羽伏見の戦いで薩長軍が徳川軍を敗り、徳川慶喜が大坂城より脱出した後、この地に入った官軍（薩長軍）は屯所として、討幕征討将軍の仁和寺嘉彰王が西本願寺津村別院（北御堂）を、薩摩藩兵は東本願寺難波別院（南御堂）を、そして長州藩兵はここ川崎東照宮を屯所としました。

造幣博物館に保存されている川崎東照宮の屋根瓦

明治６年、「徳川憎し」なのか川崎東照宮は廃されて姿を消します。

今では、屋根瓦が「造幣博物館」に保存・展示されています。

また、松平忠明が奉納した元和在銘灯籠は、大阪天満宮（北区天神橋2丁目）に保存され、今日でも見ることができます。

川崎東照宮の古写真

③大塩平八郎ゆかりの地　洗心洞跡（せんしんどう）　北区天満１丁目

「大塩の乱 槐（えんじゅ）跡」と書かれた碑

滝川小学校からすぐのところに『造幣局』がありますが、その局地内に官舎が何棟かあります。昔、このあたりは大塩平八郎の乱で知られる大塩家の屋敷がありました。大塩平八郎は大坂東町奉行所の与力を務めていましたが、３７歳のとき家督を譲り、ここで『洗心洞』という塾を開き、陽明学を教えていました。正義感が強いためか、当時飢饉で苦しむ庶民に対し、町奉行に建議をしますが受け入れられず、天保８年に決起します。しかし、同志の裏切りなどもあり、すぐに鎮圧されてしまいます。大塩平八郎は乱後、潜伏し再起を図ろうとしますが、約１か月後、居所をつきとめられ、捕り手に包囲されたため自刃します。

ここ局地内に『洗心洞跡』の碑があります。また、少し離れたところに『与力役宅門』。国道１号線沿いに『大塩の乱 槐（えんじゅ）跡』という碑が建っています。この槐というのは、大塩の乱の際、砲弾があたって裂けたまま半ば枯れ死状態という木が最近まで残っていました。

しかし、残念ながら昭和５９年伐採されてしまいます。

大塩平八郎終焉の地は、西区靱本町１－１８に碑があります。

④　造幣局　　北区天満１丁目

『通り抜け』の発案者
第一〇代造幣局長
遠藤謹助

さて、造幣局についてもご紹介いたします。造幣局の入口は、国道１号線 桜宮橋手前南側にあります。中には博物館があり無料で見学できます。（9時～16時、土、日、祝日、年末年始は休館）

守衛で見学申込みをし、入館バッジをもらい胸に付けて入ります。すぐ目に入るのは『第１０代造幣局長 遠藤謹助』及び『通り抜けの由来』の説明板です。

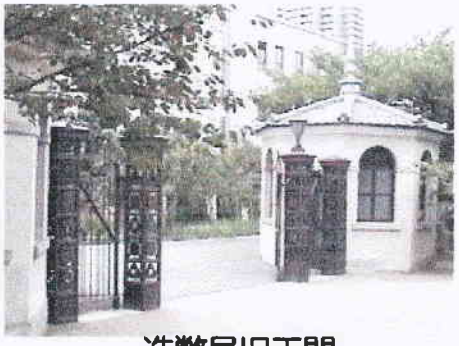
この説明板には、下記の通り書かれています。

『造幣局の所在地であるこの一帯は、昔から景勝の地で、春は桜、秋は月。夏は涼み船など四季折々のにぎわいを見せ、特に春の桜は有名で対岸を桜の宮と呼ぶにふさわしく、この一帯に桜が咲き乱れていたといわれている。造幣局の桜は、明治の初めに藤堂藩蔵屋敷から移植されたもので種類が多いばかりではなく、ほかでは見られない珍しい里桜が集められていた。明治16年、ときの造幣局長遠藤謹助氏の『局長だけの観桜ではもったいない。大阪市民の皆さんと共に楽しもうではないか』との発案から、満開時の数日間構内の桜並木を開放することになったが、花見客の混雑緩和のため一方通行としたもので、いつしか「通り抜け」と呼ばれるようになった。以来、大阪人の粘り強い郷土愛に支えられ今に続く花の里である。』

遠藤謹助は、長州藩出身で天保７年(1836)生まれ。文久３年(1863)に野村弥吉、山尾庸三、井上聞多(馨)、伊藤俊輔(博文)の４人と一緒に命がけでイギリスに留学しています。(司馬遼太郎著『花神』の中巻［新潮文庫］P58～参照) 井上、伊藤はご存知のように僅か６カ月で攘夷をやめさせようと帰国しますが、遠藤は1868年に帰国します。帰国後、明治新政府に徴され、通商権正、造幣権頭、大蔵大丞を経て 明治１５年造幣局長に就任しています。現在、大阪の人が慣れ親しんでいる『通り抜け』の発案者が、幕末の志士だったというのも何か意外な感じがします。

そこから博物館へと向かう途中、八角形をした建物「造幣局旧正門」、「明治天皇聖蹟碑」が見えてきます。明治天皇は、明治５年６月４日。明治１０年２月１５日ここを訪れています。

さて造幣博物館は、昭和４４年４月より開館。博物館の中は、貨幣の歴史、製造過程などが詳しく紹介されています。



造幣局旧正門

⑤ 泉布観（せんぷかん）　北区天満橋１丁目

国道１号線を挟んで造幣局の真向かいに『泉布観』という重要文化財に指定されている建物があります。普段は公開されておらず、春分の日（今年は3月20日）の前後３日間だけ一般公開されます。私は去年の３月２０日に行ってきましたが、たくさんの見物客で、入るのに人数制限があるため、少し待ち時間がありました。

入って建物の正面に『重要文化財　泉布観』と書かれた碑があります。この泉布観は、造幣局の応接所として、先に紹介しました 英国人技師 ウォートルスが設計 及び 監督を務め、明治４年（1871）９月に建てられました。明治５年６月４日、明治天皇がこの地に行幸されました。 大川（旧 淀川）より船で上陸され、錦の御旗を持つ西郷隆盛を従えて、この応接所に入っています。その時に、天皇はここを『泉布観』と命名します。

泉布とは貨幣のことで観は館と同じ意味。貨幣製造の発展を祈って命名されたようです。

この行幸時にエピソードがあります。

明治天皇が造幣局（当時は造幣寮といいました）の工場を見学された際、大天秤の１６Ｋｇもある大分銅を面白がって振り回したといいます。また、天皇は相撲が好きだったため、大阪代表と薩摩代表との相撲大一番をとらせました。結果、大阪方が勝って西郷が悔しがったという話も伝わっています。

明治２２年に宮内庁に献納され、正式に明治天皇の大阪行在所となりました。大正６年に大阪市の所管となり、現在は大阪市教育委員会が管理しています。

泉布観の建物は、２階建ての洋風住宅で屋根組は日本式の木造で、壁は煉瓦造りとなっています。その後、雨の多い日本に合わせた改造を行い、現在の建物は明治２６～２７年に改造されたものです。

実は、会報 第５８号（1995年4月2日新）に、幹事の太田さんが２ページにわたり『泉布観』を紹介されておられます。

詳しい内容ですのでこちらの方も、ぜひもう一度お読みいただきたいと思います。

泉布観の古写真

建物の中

⑥桜宮公会堂　北区天満橋１丁目

泉布観の建物の隣に「桜宮公会堂」という建物があります。

ここの１階玄関は、造幣局鋳造所の正面玄関を移したもので、泉布観と並んで大阪市内に現存する最古の明治建築です。

昭和９年、泉布観の隣に明治天皇記念館が建てられ、その時に移建されています。記念館は後に聖徳館に改称され、昭和２２年より１階が公会堂、２階が図書館として使用されていました。現在は１階のみ利用できます。

桜宮公会堂

後　記

今年もまた、去年に引き続き『大坂の史跡シリーズ第２弾』のイベント講師をさせて頂くことになりました。たくさんのご参加を期待します。時期は３月２０日予定。ちょうど今回ご紹介した『泉布観』が一般公開されている日です。

参考文献
大阪史蹟辞典/清文堂